



とやま、祭り彩時季【八】

夏の祭礼と行事 写真・文／木原盛夫

とやま、祭り彩時季【八】

夏の祭礼と行事 写真・文／木原盛夫

CONTENTS

- 荒木ねつおくり祭り・・・・・・・・・・4P
- ばんぶち・・・・・・・・・・14P
 - ・入善町の新屋住吉社
 - ・城端町の善徳寺
 - ・福岡町沢川の愛宕神社
 - ・氷見市下田子の八幡社
- 水橋橋まつり・・・・・・・・・・29P
- 富山の七夕まつり・・・・・・・・・・35P
 - ・戸出七夕まつり・・・・・・・・・・39P
 - ・ねつおくり七夕まつり・・・・・・・・43P
 - ・高岡七夕まつり・・・・・・・・・・47P
 - ・尾山の七夕流し・・・・・・・・・・52P
 - ・上村木の七夕祭・・・・・・・・・・59P
- 上市町の「おしょうらい」・・・・・・・・65P
- 富山の盆踊り・・・・・・・・・・77P
 - ・さんさい踊り
 - ・えんじゃら節
 - ・せり込み蝶六



- ・新川古代神
- ・米道踊り
- ・ちょんがれ踊り
- 【コラム】富山に残る・・・・・・・・・・98P
 - 日本語ラップの源流
- 千保川の灯籠流し（水天宮祭）・・・・102P
- 通町の布袋祭（山町筋の夏祭り）・・110P
- スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド・・125P
- 地藏盆・・・・・・・・・・129P

○荒木ねつおくり祭り

福光の荒木地区で約330年前の江戸時代から続く年中行事で、土用（立秋前の18日間）の入りから3日目の〈土用の3番〉に行なわれる。

稲の穂先が出てくる時期に、稲熱病（いもちびょう）などにかからないよう、子供たちが「豊年満作」「五穀豊穰」などと書いた短冊を付けた笹竹を持って田んぼをまわり、「熱送るば〜い」と一斉に声を上げて笹竹を振る。

「人間も病気になると熱が出る。稲も病気になると熱が出るので笹竹を振って熱を送る（吹き飛ばす）んです」と自治会長さんが説明して下さいました。

吹き飛ばした熱を受け止めるのが、子供たちと一緒に田んぼをまわる薬で作られたジジとババの神様だ。熱送りの最後は、熱を送った笹竹と、熱を受け止めたジジ・ババは川に流される。

5P：荒木自治会館で笹竹に短冊をつける子供たち。ねつおくり太鼓を鳴らして、13時に出発。







行列の先頭には五色旗を持った子供、その後ろをジジとババを乗せた「荒木丸」と名付けられた舟形の神輿がついて行く。大きな太鼓を順番に打ち鳴らしながら村をまわり、要所要所で立ち止まる。そして田んぼに向かって一列に並び、「豊年満作」や「五穀豊穰」などと書いた短冊を付けた笹竹を振りながら「熱送るば〜い」と一斉に声を上げる。

何箇所かで短い休憩を挟みながら、15時半過ぎまで村内を歩いた。途中で予定の道を少し省いたそうだが、それでも思っていた以上に長い距離を歩いた。6キロほど歩いたのかもしれない。





田んぼ廻りの最後は小矢部川へ。

橋の中央で福光地区のねつおくり行列と合流して太鼓の競演をした後、子供たちが笹竹を川に流す（環境汚染を考慮して、川の途中で大人が回収する）。ジジ・ババも、何年か前までは小矢部川に流していたそうだが、この後、福光ねつおくり七夕まつりに出品しなくてはいけないため、現在はロープで途中まで降ろしてから河川敷で回収している。

笹竹を流した後、自治会館へ戻って子供達の「そうめん流し」と「太鼓打ちコンクール」が行なわれた。



○ばんぶち

盤持石（ばんもちいし）というものがある。お宮の境内などで、若者たちが持ち上げて力比べをするのに使った石だ。呉西の方では、〈ばんぶち〉とも呼んでいる。奉納相撲のように、神を喜ばせる神事であり競技だったのだろう。

県内で今も盤持石が使われているのは、毎年7月24日に入善町の新屋住吉社で行われる大磐祭り、117キロの御影石を持ち上げる。

城端にある善徳寺でも盤持ち大会が行われるが、こちらは石ではなく60キロの米俵を2つ結んで持ち上げる。境内の隅には嘗て使われていたのかもしれない盤持石も置かれている。

15P上左：新屋住吉社。15P上右：鳥居の横に「大磐持発祥の地」と書いた立て札。

15P下：17時半から社殿で除蝗祭、夏越の大祓の神事を斎行した後、盤持石が置かれた塚の前でご祈祷。





16



16P上：地神を祀った塚の前に盤持石と、子供たちが持ち上げる俵が置かれている。盤持石は力石（神石）とも呼ばれる。

16P下：小学生には大きいけれど軽い俵、中学生は小さいけれど重い俵。小中学生合わせて25人以上が挑戦した。

17P：子供たちによる俵上げ大会が終わると、拝殿の前で「あらや住吉太鼓」の奉納が行なわれた。

17



18P：あらや住吉太鼓の奉納が終わると、いよいよ盤持ち大会。石は4つ並んでいるが、神石とされているのは両端の2つで、向かって左端の青石が135キロ、右端の御影石が117キロ。盤持ちに使われたのは、117キロの御影石だった。

境内にある案内板によれば、あらや大磐祭りの由来はく元亀三年（一五七三）越中の一方向一揆を憂いた上杉謙信によって神社仏閣は焼き払われて越中進攻が度重なった災害の折、住吉神社の神石も信仰的として付近の池に投げ込まれていたが其の後、村人達の手によって七月二十四日（現在の磐祭りの日）に引き上げられ再びこの神石が今日まで日照り、虫より稲作の病虫害等の厄除け神としてあがめ、一方近郊近在の若衆、荷車曳き等の力試しの石として今日に至る>とされている。しかし、入善町のHPにはく伝承によれば、上杉謙信に攻められ町を焼かれたときお宮にあった一對の神石が池に投げ込まれ、ようやく火が消え、その神石を引き揚げ、力だめしの石にした>とも書かれている。



善徳寺の盤持ち大会は、虫干法会期間中の日曜日に開催される。

盤持ちの名が付いているが、現在持ち上げているのは60キロの俵を2つ結んだものだ。境内の隅には昔はこれを持ち上げていたんじゃないかと思われる盤持石が置かれているが、定かではないという。

14時過ぎから参加者が少しずつ集まり、用意された俵で練習をする人も。15時になると「盤持講甚句」が始まり、音頭取り4人が盤持石の横に並び、踊り手が境内で円を作り輪踊りをする。「盤持講甚句」の後にはチョンガレの「目連尊者」のさわりも披露された。

盤持ち大会は15時30分からで一般の部は8人がエントリー。120キロの米俵を肩に担ぎ、反対の手を何回水平に伸ばせるかを競う。

一般の部の後は子どもの部で、こちらは小さな米俵を持ち上げた。

21P上下：善徳寺。対面所の外壁には「東西砺波盤持講」と書かれた番付表が飾られている。





22



2 2 P上中下：磐持石。音頭取り。「盤持講甚句」の輪踊り。

2 3 P：優勝した鷺田基章さんは、今回（2018年）で10連覇達成。

2 4 P上下：一般の部の様子と、小さな米俵を持ち上げる子どもの部の様子。

23



24

福岡町の沢川（そうごう）にも使われなくなった盤持石がある。2018年9月に沢川の獅子舞を見に行った時に、愛宕神社の境内に植えられた木の根っこの横に半分ほど埋もれたばんぶちが数個あるのを撮影してきた。案内板もないので、言われなければわからない。しめ縄で結界を作るなり、説明板を立てれば良いのと思う。

2018年12月3日の北日本新聞web版に＜「盤持石」見に来て 氷見市上泉自治会＞という記事が掲載されていた。1970年頃から同地区の八幡社の階段近くにあった盤持石を境内に並べて、盤持石の由来などを記した案内板を設置したということだった。

26P上下：沢川にある愛宕神社での獅子舞奉納と、神社の境内に半分埋もれている盤持石。

27P上下：氷見市下田子にある八幡社と、上泉自治会が境内で管理する盤持石。

25





盤持石は、全国的には力石（ちからいし）と呼ばれている。力石を初めて見たのは2011年2月で、加計呂麻島の須子茂集落のアシャゲ（神人が神事を行う小屋）の横に置いてあった。短い説明書きもあり「一太郎石 昔の若者の力比べに使われた石である。多い人で十七回担いで村の中を回ったと言う」と記されていた。

28P：須子茂集落のアシャゲ。手前に転がっている石が、一太郎石と名付けられた力石。

○水橋橋まつり

2018年に150回を迎えた水橋橋まつり。薄暗くなった頃、水神社の横を流れる白岩川から段ボールに乗せられた裸火が無数に海へと流され、夜には花火が打ち上げられる。

明治2年6月26日、着工から一年余りの歳月と常願寺川流域にある神社境内の大木およそ千本が費やされて水橋川（現在の白岩川）に念願の木製の立山橋（現在の東西橋）が架かった。

人々は橋の恵みに感謝すると共に、ご神木を伐ったことへのお詫びを込めて余った材木で水神社を建立し祭礼を行なった。これが今に伝わる水橋橋まつりの由来だ。

30P上：水神社。

30P下：19時頃より神事が行われる。

31P：10分ほどで神事が終わると、忌火が神社横の河原に運ばれ、篝火が焚かれる。

32P：稚児巫女による「浦安の舞」の奉奏。





河原での「浦安の舞」が終わると川岸や船から、油を染み込ませて火をつけた綿を乗せた段ボール板が川に流される。昔は屋根の葺き板を使っていたが、時代と共に手に入らなくなり段ボールになったという。無数の裸火が川を流れる中、20時より海上で花火が打ち上がる。





○富山の七夕まつり

7月7日の七夕は1月7日の七草の節句、3月3日の桃の節句、5月5日の菖蒲の節句、9月9日の菊の節句とともに五節句の一つに数えられている。元々は旧暦7月7日の行事だが、現在は新暦の7月7日や月遅れの8月7日を中心に行なわれている。

七夕と書いて〈たなばた〉と読んでいるが、語源は棚機=たなばたという説がある。日本の古い禊の行事で、乙女が着物を織って棚に供えて神様を迎え、秋の豊作を祈り人々の穢れを祓ったそうだ。選ばれた乙女は棚機女（たなばたつめ）と呼ばれ、水辺にある機屋にこもって神様のために着物を織る。その時に使われたのが棚機という織り機。やがて、この行事はお盆を迎える準備として7月7日の夜に行われるようになる。

七夕の由来や行事は時代によって変遷があるが、盆との関連を指摘するものは他にもある。『習俗富山歳時記』（巧玄出版）にはく正月の十五日に

対して、七草正月があるように、盆の十五日に対する七月七日と考えねばならない。いずれも重要な節日である。むかしから、この日に墓掃除をしたり、井戸替えをしたり、牛馬を洗ったりする。また、この日の朝、髪を洗う風習が、県内の各地にあったと書かれており、『祭り日本人』（青春出版）には、＜七月七日は「七日盆」とも呼ばれ、盆の行事の開始日ともされてきた。つまり、七夕の行事には、水神祭りの禊祓いの要素と、盆祭りの要素が混在しているのである。そもそも、「夏祭り→夏越の祓い→盆」は、それぞれが独立したものではなく、一連の行事であったと考えられる＞という記述がある。

なるほど、奄美大島の七夕は旧盆に帰って来る祖先の霊が家を迷わないように飾られると聞いた。

七夕といえば織姫と彦星の伝説だが、琴座のベガが織姫（織女星）、鷲座のアルタイルが彦星（牽牛星）で、天の川を挟んで東西に分かれて輝いている。



天の川の西岸に住んでいた織姫は機織の上手な娘で、父親の天帝の自慢だった。そんな娘の結婚相手を探していた天帝は、東岸に住む勤勉な牛使いの彦星を見つけ娘に引き合わせ、二人は結婚する。ところが結婚してからというもの、勤勉だった二人は仕事には目もくれず遊んでばかり。怒った天帝は二人を天の川の兩岸に引き離すと、今度は二人とも毎日泣いて暮らすようになる。困った天帝は、二人が毎日まじめに働くなら、年に一度、七夕の夜に引き合わせることを約束し、二人は心を入れ替えたというお話した。

and more...